

対して

① 建春門院の殿上の歌合に、「関路の落葉」といふ題に、頼政卿の歌に、

を発するとき

で た けれども

② 都にはまだ青葉にて見しかども

長い旅の末に到着すると

だつたことだ

が

紅葉散り敷く白河の関

お

読みになりましたが

時は

を頼政卿が

たくさん詠んで

③ とよまれ侍りしを、そのたび、この題の歌あまたよみて、

作↓読者

この歌を出すかどうか

思い悩ん

で

呼んで

お

になつたところ

当日まで思ひわづらひて、俊恵を呼びて見せられければ、

作↓頼政

俊恵は

います

④ 「この歌は、かの能因が『秋風ぞ吹く白河の関』といふ歌に似て侍り。

俊恵↓頼政

歌合に

けれども

出して当然見栄えが良い である

⑤ されども、これは 出で映えすべき歌なり。

ほどの出来栄え

素材を

あ

ではない

が このように

うまく取り扱うこともできるだろう

⑥ かの歌ならねど、かくも取りなし て んと、

てん……確述+推量、こどもできるだろう

巧みに

詠んだ

た

いしげに よめるところ 見え たれ。

いつ

ている

非難しなければならぬ

歌の

様子

で

ない

⑦ 似たりとて難ずべき さまにはあらず。」

判断し
とはからひ
ければ、
たので

⑧ 車
頼政が
を側へ寄せ
お
乗りになつた
さし寄せて乗られける
とき、「貴房のはからひを信じて、
あなた 判断

それならば
歌合に
のがよいであろう
さらば、これを出だすべきに
こそ。

⑨ のちの咎をば
歌合で負けた結果が出た
後 責任
負つていただきましよう
かけ申すべし。
頼政↓俊恵

と言ひかけて、出でられにけり。
話し
御
出發
になつたそうだと
作↓頼政

⑩ そのたび、思ひの
時
の歌合で
思つた通り
見栄え
が
勝つたので
出で映えして勝ちにければ、

頼政は
帰つ
すぐに
おれ
を
送り
つかはす……丁手紙や贈り物を「やります」
帰りて、すなはちよろこび
言ひつかはしたりける返事に、

⑪ 「見るところありてしか申したりしかど、
俊恵は
見所
が
あつ
そのように
た
けれど
副詞
俊恵↓頼政

勝負聞かざりしほどは、あいなくこそ胸つぶれ侍りしに、
の結果を
聞いて
いなかった
うち
むやみに
が
連用形の副詞的用法
俊恵↓頼政
逆確

⑫ いみじき高名したりと、なん、心ばかりはおぼえ侍りし。
勝つて
非常に高い手柄
を得た
の
だけ
で
自然と思ひました
俊恵↓頼政

とぞ、俊恵は語りて侍りし。
語つ
いました
作↓読者